昭和34年4月21日第三種郵便物認可　平成17年4月28日発行(木曜日発行)第47巻第17号

# 週刊文春

4月28日号　定価320円

ビデオの映像と実際の「牟婁の湯」の脱衣場。後方の背景が一致し、盗撮の現場と判明した

「白良湯」の脱衣場もビデオ映像の背景と一致。盗撮の犯人は同じ女性客と思われる

## 女性の皆さん、お気をつけください
# あなたの入浴姿は盗撮されている！

舞台はせいぜい十畳ほどの脱衣場。画面には、次々と服を脱いでいく女性たちのあられもない姿が映し出されていく。下は三歳ほどの幼女から上は三十代半ばの女性まで、誰一人として自分が被写体となっていることに気づいている様子はない――。

熱海、別府とともに日本三大温泉地の一つに数えられる和歌山県の白浜温泉。実は、この名湯の地で許しがたい盗撮行為が行われていたのである。

今回、盗撮の事実が明らかになったのは、白浜町にある「白良湯」と「牟婁の湯」の二つの町営温泉。いずれも白浜海岸沿いにあり、ビデオに登場する女性のほとんどは海水浴客と思われる。モザイクなどの修整処理は施されておらず、知人が見れば人物の特定も容易だ。こんなビデオが平然と街中のビデオショップで販売されているのだ。

盗撮行為は全国各地の温泉でも蔓延しており、野放し状態という。ゴールデンウイークの温泉旅行にはご用心を！（詳しくは特集ページをお読みください）

# 「盗撮」の現場を発見！

## 二千人 犯人は小型カメラを忍ばせた女性客だ

黒木昭雄
（ジャーナリスト）

白浜温泉の「牟婁の湯」（上）と「白良湯」（下）

CCDレンズを使った「盗撮セット」

「盗撮　関西女風呂」と書かれた文字が浮かびあがり、続いて、映像の四隅が黒く縁取られた円の中に温泉の脱衣場が映し出される。

何人もの女性が入れ替わり立ち替わり登場してはおもむろに服を脱ぎ出し、タオル片手に浴場に通じるドアへ向かう。脱衣場の広さはせいぜい十畳程度だろうか。女性のほとんどは海水浴客と思われる水着姿だ。映像は被写体を見上げるような角度で撮影されており、撮影者は大人の膝の高さほどの位置でカメラを操作していると思われる。

そのアングルの中にひときわ目を引く美人が入ってくると、カメラのレンズが微妙に動く。それまで撮っていた女性から美人のほうに焦点を移そうかどうか迷っているのだろう。

再びカメラが移動する。好みの女性を狙っているようだが、しばらくして止まった。映ったのは、「〇〇君もあがって！」と男湯に向かって呼びかける三十代の女性。その女性は「××ちゃん、静かにしてよ」と三歳ぐらいの裸の女児に声をかけた。

その後も、裸で男児にパンツをはかすヤンママ風の女性、鏡に向って髪をとかす髪の長い女性など、脱衣場の様子が延々と映し出されていくのだが、誰も自分が撮影されていることに気づいていない。顔にモザイクなどの修整は入っておらず、本人や知人が見れば容易にその人物が特定される。また、局部のヘアも丸見えで、映像に修整を加えた形跡はない。結局、約一時間のテープには数十人にのぼる女性が登場した。

この盗撮テープの舞台となったのが和歌山県の白浜温泉である。有馬温泉、道後温泉とともに日本三大古湯と称され、熱海、別府と並ぶ日本三大温泉地としても有名だ。白砂の美しさを売り物にする景勝地でもあるが、盗撮の現場となった場所は二カ所あった。

南紀白浜海岸に面した白浜町立温泉「白良（しらら）湯」と「牟（む）婁（ろ）の湯」である。白浜町によれば昨年の利用者数は両湯あわせて約二十五万人。

私は、和歌山県内で盗撮問題に長く取り組んできた私立探偵の平松直哉氏と松本敬介氏の協力を得て、この盗撮ビデオの現場を突き止めたのである。

その平松氏が言う。

## 二つの温泉で二千人以上の被害者

「私は数年前に盗撮の被害について相談を受けてから、この問題を調査し続けてきました。和歌山県内では複数の民間の温泉施設も盗撮の舞台になっており、警察にも通報しているのですが、抜本的な対策はまだ取られていません。今回、明らかになった二つの町営温泉を舞台としたセルビデオは、我々が確認しただけでも約二百六十本もあります。被害者数はそれだけでも二千人以上にのぼるでしょう」

盗撮ビデオからその現場を特定するためには、まず、ビデオの中から浴場の構造物などを抜き出してプリントする。そして当たりをつけた入浴施設に出向き、写真とつき合わせながら現場を特定するのだ。今回の作業も同様にして行われた。

まず「白良湯」。この場所が特定できたのは、脱衣所内に設置されている洗面台とドア、注意書きを書いた壁紙など、ビデオと同一の場所であることを示す材料が複数あったからだ。特に洗面台の鏡は上部がやや半円形なのでそれだけでも特徴があるが、ローアングルで撮影されたと思われる鏡の中に、絶対に変更することのできない木造屋根の骨組みが映し出されていた。

そして「牟婁の湯」。ここでは「お客様へ」と題す

# 超有名温泉 やりたい放題

**女性芸能人の入浴シーンやトイレシーンを盗撮したというビデオが出回り物議を醸したのは記憶に新しいが、被写体になるのは芸能人ばかりではない。一般人を狙った盗撮も全国各地の温泉に蔓延しているのだ。ゴールデンウィークに温泉旅行を計画中の人はご用心！**

1本8000円で市販されている

る注意書きのパネルがビデオに映っていた。色調が年婁の湯にあるパネルとまったく同じだ。ビデオでは判読できないが、実物のパネルの最下部には白抜きの文字で「白浜町観光課」と書かれている。これが現場を特定できた根拠である。

人の裸はプライバシーの最たるものだ。とりわけ女性にとって自分の裸は他人には絶対に見られたくないものだろう。そのため、入浴施設に従事する者には徹底した防犯対策が求められてしかるべきだが、現実はご覧のとおり。安心して利用できるはずの公共の施設が、いとも簡単に盗撮犯の仕事場にされていたのだ。

この『盗撮　関西女風呂』（企画・制作　マジカル）シリーズは全四巻あり、一本八千円で販売されている。いわゆる〝裏ビデオ〟ではなく、街中のビデオショップでも平然と売られている。

市場に流通する盗撮ビデオの実態について解説すると、代表的なのは今回のような女性の脱衣シーンや入浴シーンを撮影したものだが、他にもラブホテルや野外でのアベックを盗み撮りした〝のぞきモノ〟など、様々な種類がある。援助交際で女子高生と知り合った男がセックスシーンを密かに撮影し、それをセルビデオとして販売することもある。被写体とされた少女がその事実を知って自殺する事件まで起きているという。

盗撮という犯罪をこれほど容易にしたのは、小型ビデオカメラの出現だ。冒頭に紹介したビデオの映像の四隅が黒く縁取られているのは、ピンホール型のレンズで撮影した場合の特徴で、直径四ミリほどのレンズを装着したビデオカメラで盗み撮ったものだろう。

最近では「防犯対策」と称して開発されたファイバースコープ型のCCDレンズも普通に市販されており、盗撮カメラの偽装をより容易にしている。

かつて盗撮犯の一味として暗躍していたという田中太郎氏（仮名）が盗撮ビデオ市場の実態を解説する。

「セルビデオのメーカーは必ず複数の下請け業者を抱えていて、実際に盗撮ビデオを作るのは、この下請けなんです。メーカーから制作費を受け取った下請け業者は、まず盗撮実行者を募り、盗撮実行者が撮影したビデオを買い取って編集作業を加える。そして編集済みのテープをメーカーに渡し、メーカーはそれを自社ブランドの商品として出荷する。これで万一、警察の捜査が入っても、下請けが『撮られる側も合意の上で作った〝ヤラセ〟だ』と言うので買い取ったと、メーカーが言い逃れできる仕組みになっているんです」

こうした盗撮ビデオの売上げは、軽く見積もっても業界全体で五十億円を下らないという。

ではどのような方法で盗撮をするのだろうか。

前出の田中氏が続ける。

「例えば、今流行のスパ系入浴施設も狙いどころです。洗い場の盗撮では、ターゲットの女性の全身をくまなく撮影します。特に、洗髪中の女性は油断しているので、股間に容赦なくレンズを向けます」

田中氏はこの手口を〝追

2005.4.28
週刊文春

い撮り〟と呼ぶが、文字通り犯人が狙った女性を執拗に追いかけている様子が画面の動きでわかる。

こうした盗撮は女性が実行犯でなければ成立しない。彼女らに支払われるギャラはビデオの質によっても異なるが、通常二時間程度の〝撮りテープ〟で一本あたり三万円から五万円だというから、アルバイト感覚で犯罪に加担する女性が出てきても不思議ではない。

盗撮の機材についても説明しておこう。

洗い場で使う盗撮機材はプラスチック製のカゴの中に仕込まれているケースが多い。浴室という場所柄、裸の撮影者がカメラを隠すところが他にないからだ。

## トイレを装った〝盗撮スタジオ〟

四十六ページ右上の写真は田中氏から聞き出した方法で作ってみた盗撮道具である。カゴの中身は一見普通のお風呂セットのように見えるが、カゴの格子部分からわずかにのぞくトリートメントチューブの先端部分に、外付けの超小型CCDレンズが仕込まれている。そしてシャンプーボトルの中にカメラ本体とバッテリーが隠されている。それらはすべてコードで繋がれているが、タオルなどでカモフラージュすれば簡単に見破ることはできない。

他にも「飛ばし」と呼ばれる盗撮機材がある。これは発信機を取り付けた小型レンズで画像を受信機に送る盗撮方法だ。例えば、駐車場に面した場所に露天風呂のある入浴施設では、仲間の盗撮犯が駐車場で映像を受信している可能性がある。利点は小型で軽量なために人目につきにくいことだが、電波を使って画像を飛ばすために遮蔽物に弱いという欠点もある。

変り種はリモコン式の盗撮カメラだ。この方式は、見晴らしのいい場所にある露天風呂の盗撮に使われる。超望遠レンズで、遠距離から女性の入浴場面を盗撮するという方法だ。

入浴施設だけではない。どんなに注意しても盗撮を防げない場合がある。それが公衆トイレを装った〝盗撮スタジオ〟だ。前出の田中氏によれば、数年前の夏、和歌山県内の磯ノ浦海岸近くで大規模な盗撮が行われた事例があるという。

犯人グループは約八百万円もの大金を投じ、公衆トイレに見立てた盗撮スタジオを空き地に建て、数カ月間にわたって女性のトイレシーンを盗撮していたというのである。

盗撮グループはまずトイレの利用者の素顔を撮影するために、一台目のカメラを屋外の入り口付近に仕掛けた。トイレの室内には、利用者の前後左右に四台の隠しカメラを仕掛け、その一部始終を様々な角度から撮影した。こうして作り出された膨大なビデオは「ギャル編」「おねえ編」などといったタイトルをつけられ、無修整のまま販売されている。その数約六十タイトル。この〝スタジオ〟で撮影されたビデオの売上げは五千万円を下らなかったという。

入浴施設にしろトイレにしろ、被害女性を知る第三者がそのビデオを見た場合、二次犯罪が生じるおそれもある。第三者が映像をもとに金品を要求するなど、ビデオが恐喝の材料になり得るからだ。

ではなぜ盗撮犯罪はなくならないのか。その最大の理由は「被害者がいなければ捜査はできない」として捜査を拒み続けてきた警察の怠慢にある。

私は昨秋の時点で和歌山県内の民間の入浴施設での盗撮の実態を和歌山県警に伝えていた。だが、約半年が経過した現在でも捜査が進展している形跡はない。

撮られた被害者自身が被害届を出すか、盗撮現場となった入浴施設が建造物侵入などの容疑で被害届を出さない限り、警察は動かないのだ。被害者の大半は自分が被写体になっていることを知る由もなく、たとえ知ったとしても泣き寝入りするケースがほとんどだ。施設のほうも集客への影響を考え、盗撮の現場になったことを隠そうとする。

では、今回、新たに盗撮の現場であることが判明した町立温泉「白良湯」と「牟婁の湯」を経営する白浜町はどう答えるのか。

立谷誠一町長は、私の取材にこう答えた。

「白浜温泉は家族連れのお客さんに安心して来てもらえる健全な街づくりを目指していますので、事実なら、検討して対処します」

だが、後日、溝端雅芳企画観光課長から「被害届は出さない」という連絡が入った。「映されている人の人権を考えて」のことで、今後は盗撮を未然に防ぐために関係者に注意を喚起したいと言う。具体的には、女性警察官による巡回を強化してもらったり、「盗撮」という文字を入れた警告看板を設置するのだという。

盗撮が露見しても被害者も施設も声をあげず、警察も独自に捜査をしようとしない。この悪循環を断ち切らない限り、盗撮犯罪は決してなくならないのだが。

絶対安全な温泉はない